



新学習指導要領の趣旨を踏まえた

「観点別学習状況の評価」実施の手引き

～育成すべき資質・能力をバランスよく確実に育むために～

各教科事例集

令和3年1月

大阪府教育委員会

国語科における観点別学習状況の評価の進め方について

ここでは、教科「国語」の科目「言語文化」を例に、「指導と評価の一体化」を実現するための観点別学習状況評価の進め方について説明する。

1 科目の「評価の観点の趣旨」の作成について

「指導と評価の一体化」を図るためには、学習指導要領に示された教科・科目の目標や内容、「改善等通知」に示された教科の「評価の観点及びその趣旨」に基づき、科目の「評価の観点の趣旨」を設定することにより、その科目の学習を通して育成をめざすべき資質・能力と評価の基本的な枠組みを捉えることが大切である。

以下は、教科の目標と「評価の観点及びその趣旨」との関係性を踏まえた、「言語文化」の目標に対する「評価の観点の趣旨」の例である。

【「第2款 第2 言語文化」の「評価の観点の趣旨」(例)】

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めている。	「書くこと」、「読むこと」の各領域において、論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしている。	言葉を通じて積極的に他者や社会に関わったり、思いや考えを広げたり深めたりしながら、言葉がもつ価値への認識を深めようとしているとともに、進んで読書に親しみ、言葉を効果的に使おうとしている。

2 指導と評価の年間計画(シラバス)について

指導と評価の年間計画(シラバス)の作成にあたっては、1の「言語文化」の「評価の観点の趣旨」に基づき、単元ごとの評価規準を設定する。指導と評価の年間計画(シラバス)は教材の配列ではなく、年間を通して教科・科目の目標の実現をめざすためのものである。学校教育目標、生徒の発達段階や学習状況を考慮するとともに、他教科との関連も見通して、年間の学習内容を計画する必要がある。

※「言語文化」指導と評価の年間計画(シラバス) <記入例>

学期	単元名	学習内容	単元の評価規準	評価方法		
				知(a)	思(b)	主(c)
○学期	作品の主題について考え、述べる	小説「羅生門」と、その原作と言われる「今昔物語集」を比較し、それらの違いから分かる「羅生門」の主題や作者の意図について考え、文章でまとめる。	a : 文章の意味は、文脈の中で形成されていることを理解している。 b : 「読」「読むこと」において、内容や構成、展開などについて叙述を基に適切に捉えるとともに、文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。 c : 進んで文章全体を整え、今までの学習を生かして自分の考えを述べ、他者の意見を踏まえながらよりよいものにしようとしている。	定期考査 ワークシート	ワークシート 観察	ワークシート 振り返りシート
				・基本的には、当該「内容のまとまり」で育成をめざす資質・能力に該当する【 知識及び技能 】、【 思考力、判断力、表現力等 】で示された内容をもとに、その文末を「～している」「～することができる」などとして評価規準を作成する。 ・「思考・判断・表現」の冒頭には、当該単元で指導する一つの領域について、「～において」と明記する。		

基本的には、「改善等通知 別紙5 各教科等の評価の観点及びその趣旨<国語>」における「主体的に学習に取り組む態度」をもとに、当該の「内容のまとまり」で育成をめざす「**知識及び技能**」や「**思考力、判断力、表現力等**」の指導事項等を踏まえ、その文末を「～しようとしている」として評価規準を作成する。

2 内容 [知識及び技能] (1) エ、 [思考力・判断力・表現力等] B 読むこと (1) ア、エ、(2) イ、ウより>

[知識及び技能] (1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 エ <u>文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること。</u>
[思考力、判断力、表現力等] B 読むこと (1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア <u>文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。</u> エ <u>作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。</u> (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 イ 作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。 ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

3 単元における観点別学習状況の評価の進め方

ここでは、上の「言語文化」単元名「作品の主題について考え、述べる」を取り上げ、国語科における観点別学習状況の評価の進め方について紹介する。

(1) 単元における指導と評価の計画

ア) 科目名：言語文化

イ) 単元名：作品の主題について考え、述べる [全9時間]

ウ) 学習指導要領との関連： [知識及び技能] (1) エ

[思考力・判断力・表現力等] B 読むこと (1) ア、エ、(2) イ、ウ

エ) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文章の意味は、文脈の中で形成されていることを <u>理解</u> している。	「読むこと」において、内容や構成、展開などについて叙述を基に適切に捉えるとともに、他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることができている。	進んで文章全体を整え、今までの学習を生かして問いに対する自分の考えを客観的に述べ、他者の意見を踏まえながらよりよいものにしようとしている。

オ) 指導と評価の計画 (全9時間)

●…形成的評価、○…総括的評価

次	主な学習活動	評価の観点			評価規準・評価方法
		知	思	主	
1 (1、2時限)	・「羅生門」を音読する。 ・「羅生門」を讀解し、作品の主題について、自分の考えをワークシートに書き込む。	● 例1	●		[知①] (ワークシート①) ・文章構成やその特徴を把握し、文章表現から登場人物の心情を把握するなど文章を <u>理解</u> している。 [思①] (ワークシート①) ・読解を通じて得た知識を基に、「羅生門」の主題について <u>考える</u> ことができている。
2 (3、5時限)	・「今昔物語集」と読み比べを行い、「羅生門」との違いをまとめる。 ・なぜ違いを設けたと考えられるか、主題設定を軸として意見をまとめる。 *グループ活動	● 例2	●	●	[知②] (ワークシート②) ・「今昔物語集」を読み、表現や構成の違いから、解釈が変わる点などを <u>まとめる</u> ことができている。 [思②] (ワークシート②、観察) ・表現や構成の違いから解釈が変わる点に基づき、主題に対する自分の意見を <u>まとめる</u> ことができている。 [主①] (観察) ・主題に対する自分の考えを述べ、他者の意見を踏まえ、自分の意見を <u>考え</u> ようとしている。

3 (6、7時限)	・スピーチ及び質疑応答を行う。	●	●	[思③] (観察) ・文章の構成や展開の適切さを吟味して、自分の考えを <u>述べて</u> できている。 [主②] (観察) ・文章の構成や展開の適切さを吟味して、自分の考えを <u>述べ</u> ようとしている。
4 (8、9時限)	・スピーチを聞いて、表現や構成について参考になったことや、他者の指摘について納得したことなどを振り返り、自分の意見を再考する。	○	○	[思④] (ワークシート③) ・「今昔物語集」との違いを踏まえて、「羅生門」の主題についてここまで学んできたことから、自分の考えをよりよいものにするとともに、文章の理解を深めることができている。 [主③] (振り返りシート) ・描き方の違いによって生まれる解釈の差異に関心を持ちながら、自ら進んで自身の意見をよりよいものにし、今後の学習に <u>生かそう</u> としている。

題材の評価規準を設定したら、題材の指導計画に示された学習過程を考慮しながら、それぞれの評価規準に対して、いつ、どのように評価を行うかを計画する。生徒全員について、毎時間「ワークシートの記述」を確認し記録を残すような評価の在り方は多大な時間を要し現実的には困難である。本事例では、日々の授業の中では、生徒の学習状況を把握して指導に生かすこと（形成的評価）に重点を置きつつ、評価の記録（総括的評価）については、基本的に単元のまとめりごとにそれぞれの評価規準の実現状況が把握できる段階で効率的・効果的に評価を行う計画としている。

国語科における評価については、個々の観点を単独で評価することはあるが、特に、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価については「知識・技能」の観点と密接に関連しながら評価を行うことが多いと考えられる。本事例では、第1～3次は3つの資質・能力育成の土台作りにあたる学習活動であるため、3観点ともに形成的評価とし、第4次の学習活動の中で「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を総括的に評価する計画としている。また、「知識・技能」の総括的評価は、定期考査においてペーパーテストで行うこととする。

なお、この単元における指導と評価の計画では、「読むこと」の領域として指導することとしている。これは、「3領域の授業時数は重複しない」という考え方に基づくものである（(3)のイ参照）。

(2) 具体的な評価方法（評価課題や判断基準）について

ア) 「知識・技能」の評価

「知識・技能」については、単に知識を暗記したり技能を用いたりすることのみで評価されがちだが、ペーパーテストで評価を行う場合にも、知識の概念的な理解を問う問題に取り組ませたり、習得した知識を用いて表現する場面を設けることなどが求められる。

本事例では、第1次において、登場人物の心情読解や描写による効果を問う学習活動を行い、「ワークシート①」の記述により、理解できているか確認した上で次の学習につなげる〔知①〕とともに、読解により得た知識から作品の主題を考える取組みを評価する〔思①〕。

右に示した「ワークシート①」では、(4)を考えさせるため、まず(2)(3)の内容についてまとめさせている。(4)の「羅生門の主題」について、内容や表現と関連付けて考えることができれば、「おおむね満足できる」状況(B)と判断する。

例1 評価規準〔知①〕〔思①〕 「ワークシート①」

- (1) 羅生門のあらすじを書きなさい。
- (2) 登場人物のそれぞれの場面や行動における心情をまとめなさい。
- (3) 羅生門の文章表現の特徴を書きなさい(箇条書きで良い)。
- (4) 「羅生門の主題」を考えて書きなさい。

また、複数の情報が関連付けられていれば「十分満足できる」状況(A)と判断する。なお、(4)に達していない場合は、卑近な例をとりあげて、表現の違いによる気づきを促すなどの指導が必要である。

第2次では、右に示した「ワークシート②」を用いて、原作との表現や構成の違いから、解釈や文章全体の意味がどのように変化するか考えられているかを見取る〔知②〕。その上で、比較により得た知見から、作品の主題について考えさせる。また、ここではグループ活動を行い、それぞれが考えた意見を共有し、新たな気づきにより再考させることにより「思考・判断・表現」を見取る機会とした〔思②〕。

例2 評価規準〔知②〕〔思②〕「ワークシート②」

- (1) 今昔物語集との違いで注目したところは
- (2) 違いから受ける印象や効果は
- (3) 話し合いの結果、羅生門の主題は
- (4) 根拠をまとめると

イ)「思考・判断・表現」の評価

「思考・判断・表現」については、国語の各科目の〔知識及び技能〕を活用して、課題を解決するなどのために必要な〔思考力、判断力、表現力等〕を身に付けているかどうかを評価する。本事例では、第3次において、主題に対する自分の考えを発表する場面を設定した。なお、これまでの単元において「話す・聞く」活動を行っていない場合には、発表の仕方や工夫について、事前の学習が必要となる。

【「思考・判断・表現」評価規準〔思④〕について】

第4次には、本単元における「思考・判断・表現」の評価規準とした「内容や構成、展開などについて叙述を基に適切に捉えるとともに、他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることができる」状況を、『今昔物語集』との違いを踏まえた『羅生門』の主題について、ここまで学んできたことを基に自分の考えをよりよいものにするるとともに、文章の理解を深めることができる」姿と捉えて、「ワークシート③」の記述を基に総括的評価を行う。なお、ワークシートの記述の評価にあたっては、ルーブリック（評価基準表）を作成し、生徒に予め提示しておくことも考えられる。

例3 評価規準〔思④〕 ワークシート③

評価規準〔思④〕 に対する判断基準

- 「十分満足できる」状況(A)
主題についての自身の意見を、文章の比較を通じて考え、他者からの指摘を踏まえながら複数の根拠を示し、丁寧に述べられている。
- 「おおむね満足できる」状況(B)
主題についての自身の意見を、文章の比較を通じて考え、他者からの指摘も踏まえながら根拠を示し、述べられている。
- 「努力を要する」状況(C)
主題についての考えを述べられていない。

■「おおむね満足できる」状況(B)と判断した生徒Aの記述例

- 1 以前の内容と変えたところは…
主題を「理不尽で不可解な下人」から、「人間の避けられないエゴイズム」にしたこと。
考えた主題に関係する根拠を補強したところ。
- 2 なぜ変えたのかということ…
原作と読み比べた後のグループ活動のなかで、作者の視点に気付いたから。
発表後の質疑応答の時に、限られた部分の表現を根拠にしていることを指摘されて、確かに根拠が弱いと思ったから。
- 3 『羅生門』の主題について
私が考える羅生門の主題は、「人間の避けられないエゴイズム」です。
原作と本作との比較を通じて、第三者である作者の目線で描かれているところに着目しました。原作は部分的にナレーションのようなところはあるものの、本作では登場人物の心情をよりリアルで生々しく表現する作者の存在が作品全体に感じられます。そのリアルさから、いい加減な理由で、ある時は正義に燃え、ある時は悪に走るといった下人の姿を描き、自分勝手に都合のいい理屈を述べる老婆とともに自分本位に行動してしまう人間の心そのものの有様が主題として描かれていると考えました。

生徒Aさんの場合、当初の自分の考えが、様々な学習活動を行う中で変容し、他者からの指摘も踏まえながら根拠とともに表現し直すことができていることから、「おおむね満足できる」状況（B）と判断した。根拠にあたる部分が多岐にわたり、自分の意見に関連付けられておれば十分満足できる状況（A）と判断できる。これは、文章の様々な表現と関連付けることによって、文章の理解が深まっていることが確認できるためである。

ウ)「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「主体的に学習に取り組む態度」は、評価の観点の趣旨に照らして〔知識及び技能〕を獲得したり、〔思考力、判断力、表現力等〕を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価する。

ここでは、本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準とした「進んで文章全体を整え、今までの学習を生かして自分の考えを述べ、他者の意見を踏まえながらよりよいものにしようとしている」状況を、評価規準〔主③〕である「描き方の違いによって生まれる解釈の差異に関心を持ちながら、進んで自身の意見をよりよいものにし、今後の学習に生かそうとしている。」姿と捉えて、「振り返りシート」の記述から総括的評価を行う。その際、ワークシートも併せて評価材料とする。

「振り返りシート」の①では、文章全体を整えるために何を考え、そこからどういった工夫をしたかという「粘り強さ」を、②では、自己の学びを振り返り、今後の学習の見通しを書かせることにより「自らの学習を調整する」姿を見取することを意図した。

例4 評価規準〔主③〕「振り返りシート」

①原作と比較してどのようなことに気づき、意見を書く際に、どういった工夫をしましたか。

②本単元を通して学んだことや疑問点を挙げ、今後の学習にどう生かそうと考えているか書きなさい。

■「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒Bの解答例

①原作と比較してどのようなことに気づき、意見を書く際に、どういった工夫をしましたか。

原作と比較すると、ナレーションに相当する部分の描き方に大きな違いを感じた。原作では、簡素で事実のみを描いていたが、『羅生門』ではまるでそこにいる人が見ているかのようなリアルさや、下人の心情を代弁するような距離感で描かれている部分が面白いと思った。

私は「生への執着」を意見として書いた。最初は、下人と老婆の姿からこのテーマを考えていたが、原作と比較してみると、先ほども書いたような違いから、「人間の生」に執着している部分の設定や描写が増やされていることが分かったので、具体的な記述を挙げながら、自身の意見を補強した。スピーチをしたときに、様々な動物を作中に挙げていることについて言及していないことを指摘されたことで、もしかしたらリアリティ以外にも恐ろしさや気持ち悪さを表現する一つになっているかもと考え、表現を整理し、意見を再構成した。

②本単元を通して学んだことや疑問点を挙げ、今後の学習にどう生かそうと考えているか書きなさい。

今回の学習で学んだことは、本作だけで小説を味わうことも面白いが、読み比べることで新たな発見があることだった。原作の骨組みだけを使い、違う形で表現するというのは、漫画やアニメで触れたことはあったが、精密に読むことで改変の意図を考えたり話し合ったりすることで色々な発見があるのが面白かった。

今後、違う小説を読むときに、表現の意図にこだわって読んでみようと思う。作者の意図が何なのか考えるのは面白いし、文章全体に込められた作者の思いを考えてみたい。

生徒Bさんの場合、①からは今回の学習活動の中で学んだことを生かし、自分の意見を他者からの意見を踏まえ、新たな観点で見直させており、粘り強く学習に取り組んだ結果、文章の理解が深まっていることが分かる。また、②からも別の学習において、今回の学習で学んだことを生かそうとする姿勢が読み取れることから、十分満足できる状況（A）と判断した。

(3) 国語科における観点別学習状況の評価に係る留意事項

ア) 形成的評価と総括的評価

国語科においては各領域にかかる指導事項を基に様々な学習活動を行うが、各単元において行うすべての学習活動を評価する必要はなく、単元のまとまりの中で育成をめざす資質・能力が身に付いたかどうかを評価する。例えば、「話すこと・聞くこと」にかかる資質・能力を育成しようと単元計画を立て、「読む」活動や「書く」活動を行うが、それらは「話すこと・聞くこと」にかかる資質・能力を育成するための活動であり、それぞれの活動を評価しなくてもよく、適宜、形成的評価の材料とすればよい。

総括的評価については、単元の中で様々な活動を通じて、生徒の力が伸びきったと思われるところで、育成をめざす資質・能力が身に付いているかどうかを評価することが大切である。

イ) 各領域における授業時数について

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）において、学習指導要領に示される国語科のすべての科目の「2 内容」は、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕から構成され、その〔思考力、判断力、表現力等〕は「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の3つの領域から構成されている（科目によって設定されている領域は異なる。設定されている領域は以下の【参考】を参照）。

また、学習指導要領の「3 内容の取扱い」には、科目ごとに設定された各領域の指導に相当する授業時数が定められている。例えば、「現代の国語」の場合、『A 話すこと・聞くこと』に関する指導については、20～30 単位時間程度を相当するものとし、計画的に指導すること。」と示されている。そして、そのことに関して学習指導要領解説には、「この配当時間は『A 話すこと・聞くこと』に関する内容を指導するために要する時間を基礎として定めたものであり、『B 書くこと』及び『C 読むこと』に関する指導とは区別して計画することが必要である。」と示されている。すなわち、「3 領域の授業時数は重複しない」ことが前提となっていることに留意が必要である。

【参考】各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

	〔思考力、判断力、表現力等〕		
	A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと
現代の国語	20～30 単位時間程度	30～40 単位時間程度	10～20 単位時間程度
言語文化		5～10 単位時間程度	【古典】 40～45 単位時間程度
			【近代以降の文章】 20 単位時間程度
論理国語		50～60 単位時間程度	80～90 単位時間程度
文学国語		30～40 単位時間程度	100～110 単位時間程度
国語表現	40～50 単位時間程度	90～100 単位時間程度	
古典探究			※

※「古典探究」については、「読むこと」の領域だけであるため、授業時数は示されていない。

国語科の目標である「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」の育成に向けた指導の充実をめざし、指導と評価の年間計画（シラバス）の作成にあたっては、これらのことを踏まえ、「指導のねらいを明確にする」ことが重要である。